

29 海軍大医監奥山虎炳

深瀬泰且

奥山虎炳は天保十一年（一八四〇）一月八日に、奥山玄仲の長男として長崎で生まれた。玄仲は出羽国上山藩医で、神田お玉ヶ池種痘所の設立にあたって、それに協力した江戸在住八三名の蘭方医の一人である。虎炳は幕末までは玄省を名のっていたので、以下江戸期は玄省をもちいる。

玄省が長崎生まれであることは、「奥山家系図」が教えるところであるが、上山藩医玄仲の子が長崎で生まれたというのは、玄仲が長崎に遊学していたことをうかがわせる。

玄省は幼時父玄仲にしたがつて江戸にでて、林家の第一代大学頭復斎（述斎の第六子）、や安積良斎、安井息軒についで儒学を学んだ。はじめは父から、のちには堀達

之助にオランダ語を学んでいる。

文久三年（一八六三）九月、玄省はあらたに創設された歩兵屯所附医師となり、西丸下屯所詰となった。慶応元年（一八六五）五月には歩兵屯所附御抱医師富士見御宝蔵番格となり、慶応三年（一八六七）五月には歩兵屯所附医師取締介に昇進した。慶応四年（一八六八）の幕府互解まで歩兵屯所附医師として、東海道を往復して京、大坂の地の警護にあたった歩兵組につきそって、その医療面を担当した。

徳川幕府の崩壊後早い時期に新政府の医療関係機関に出仕したが、その時期はあきらかではない。明治二年（一八六九）三月にはすでに大病院三等医師に就任しており、さらに同年一二月には大学校中助教に昇進している。おそらくこのころ虎炳と改名したものとおもわれる。

虎炳は明治四年（一八七一）九月大学から兵部省に転属になり、翌年二月兵部省が陸海軍の二省に分離したさいに海軍省出仕となった。明治六年（一八七三）一月発行の『袖珍官員録』には、虎炳は大医監（大佐相当官）として海軍軍医寮の軍医のトップをしめている。事務方は石神

豊民が軍医寮助でトップの座をしめている。明治六年（一八七三）八月には、海軍病院学舎（のちの海軍軍医学校）の舎長をかねた。

海軍軍医として常にトップの座をしめていた虎炳であったが、明治八年（一八七五）四月石神豊民の死後、後輩である戸塚文海にその地位をおびやかされるようになり、明治九年（一八七六）八月新設の海軍医務局長に戸塚文海が就任するにおよび、ついに海軍を退官した。三七歳という、まさに働き盛りであった。

以後東京・芝赤羽根で開業していた父玄仲を手伝って開業医生活をつづけ、明治三四年（一九〇一）にその業を廃した後は悠々自適の生活をおくり、大正一五年（一九二六）一月一三日八七歳で病没した。この間まったく世にでようとせず、『海軍軍医会雑誌』にさえ死亡記事を見出すことはできない。

奥山虎炳に著書はないが、校閲した出版物として、海軍病院学舎外国人教師エドウィン・ホイラーの講義の翻訳書である『官版講筵筆記』と『海軍軍医寮薬局方』がある。とくに前著では虎炳が、諸言と例言を執筆して

いる。

またそのころの海軍病院学舎では生徒の英語力がとほしく、ホイラーやウィリアム・アンダーソンの講義を充分理解することができなかったため、虎炳が中心になってこれらの講義の通訳にあたった。

（東京慈恵会医科大学・順天堂大学医学部）